

♥♥♥♥♥ことばを育てる親の会北海道協議会 ♥♥♥♥♥HSK ♥♥♥♥♥

HSK 会報

昭和48年1月13日第三種郵便物承認 HSK通巻第609号
(毎月10日発行) 2022年12月10日発行
発行人 北海道障害者団体定期刊行物協会(HSK)
編集人 特定非営利活動法人
ことばを育てる親の会北海道協議会 会長 福井 紀郎
連絡先 〒060-0041 札幌市中央区大通東6-12
札幌市立中央小学校ことばの教室内
TEL011-241-2533 定価100円

♥♥♥♥♥ 2022.12.10 ♥♥♥♥♥ No.180 ♥♥♥♥♥



子どもたちの笑顔のために

NPO 法人 ことばを育てる親の会北海道協議会
副会長 齋藤寛子

新型コロナウイルス感染防止による行動制限が緩和された令和4年。皆さまはどのようにお過ごしになられたでしょうか？数年ぶりに旅行に行かれた方、仲間との語らいの場を設けた方など様々だと思われませんが、未だ、かつてのような自由な気持ちで行動を選ぶことは躊躇され、それぞれ細心の注意と万全の感染対策をされていることと存じます。学校も、行事は日程を分割したり、適度に集団をコントロールしたりなど、最新の情報をもとに感染対策方針がとられ、子どもたちの行事や登校日は少しずつ取り戻されているようです。しかし、新規感染者数は日々、過去最高を更新するような状況です。罹患された方が一日も早く日常を取り戻されることを願っております。

さて、私はこの度、新たに副会長に選任をいただきました。親の会の活動に関わるようになって、およそ10年が経とうとしています。当時、就学前だった子どもも、この冬は高校進学を目指す受験生です。これまで、親の会の成り立ちや存在の重要性をお教えくださった諸先輩方への感謝とともに、50年を超える親の会の歴史を支えてくださった皆さまに恥じることはないよう務めて参りたいと思っております。

私が親の会の活動に関わるようになった当初から参加し続けている行事が、余市教育福祉村で行われる「親子キャンプ」です。幼い子どもたちを連れて参加したキャンプも、いつしか運営側になり、今年は予定していた夏から秋へと開催を延期し、規模も縮小して「親子デイキャンプ」を実施しました。4歳～15歳の子どもたち11名と、北海道教育大学 札幌校の学生さんたち5名のほか、保護者やサポートの大人たちが参加しました。このキャンプの最大の魅力は【自由】です。怪我や人を傷つけなければ何をしてもいいし、何もなくていいのです。今回も、素晴らしい秋晴れの中、壁に落書きをしたり、歌ったり、おイモを掘ったり…自由に遊びました。そして、キャンプファイヤーと花火をして、日が落ちて足元が見えなくなるほど暗くなるまで楽しみました。後日、いただいたお礼のメールの中に、お子さんがキャンプの思い出を家庭学習のノートに日記を書いて、写真をたくさん貼って、お友だちや担任の先生やことばの教室の先生、学童の先生にもニコニコ笑顔でたくさん自分の「ことば」で話せたことが書いてありました。日々、「私にできることは何だろう」と考えますが、このように親の会だからこそ用意できる「場づくり」はとても大切な活動のひとつだと考えています。

最後になりますが、会員の皆さま、そして日頃から子どもたちの成長に情熱を持って指導していただいている先生方ならびに関係者の皆さまが、ご家族みな健やかに過ごさるようご祈念申し上げ、副会長就任のご挨拶、そして会報第180号の巻頭言とさせていただきます。



親子デイキャンプに参加して



札幌地区親の会
齋藤香羽子

2022年10月1日(土)13~18時、余市教育福祉村で親子デイキャンプが開催されました。私は小学校入学前から、このキャンプに参加しています。今年は、子どもの数も学生さんの数も少なかったけれど、自分たちのやりたいことに対していろんなことを提案してくれました。毎年、夏のキャンプですが、今年は秋のキャンプでした。サツマイモをたくさん掘ることができて、秋の収穫の作業がとても楽しかったです!みんなで掘ったサツマイモは、キャンプファイヤーの火でヤキイモにして食べたので、秋の味覚も楽しめました。私は、イモ版づくりもしたので、制作も楽しめました。いつも、やりたいと思うことを全力でサポートしてくれて、やりたいことをやらせてくれて、好きなように動けるので余市のキャンプが大好きです。いつでも参加したいですし、また泊まったり、みんなでご飯を食べたりしたいです。





ボランティアとして参加して

佐藤 那穂乃

皆様初めまして。北海道教育大学に所属しています佐藤那穂乃と申します。この度理事長平野先生のご紹介で10月1日に開催されたデイキャンプにスタッフのボランティアとして参加させていただきました。今回機会をいただき、このデイキャンプの感想を書かせていただきます。拙い文章にはなりますが、最後までお読みいただくと幸いです。

率直な感想は、この教育福祉村はとても穏やかでとても過ごしやすい、誰のことも拒まないような場所だと感じました。子供も大人も誰もがのびのびしているように思えました。私はひたすら栗拾いをしていたので誰がどんな風に過ごしているのかは具体的には知らないのですが、誰がどこで何をしても良くて、本当にただ穏やかな時間でした。誰にとっても過ごしやすい場所だと思います。私はそう思いました。

もう一つ、学校でも家でもない行き場、居場所があるのはいいなと思いました。上手く表現できないのですが、小学生や中学生の時はおそらく多くの時間を学校と家で過ごすでしょう。世界が家と学校だけで完結してしまうといいでしょうか、この二つが世界のほとんどなので、どちらかが居心地の悪い場所、なじめない場所であると、過ごす時間の半分くらいは疎外感をずっと感じ続けることになり得ます。私の場合はそうだったというだけで個人の感想ですが、少しでも世界が広い方が息苦しい時間は減らせるのかもしれないと思います。

最後に、このデイキャンプに参加して本当に良かったと思っています。今では全くやらなくなってしまった花火がとても綺麗で印象に残っています。参加した子供たちにとってもこのデイキャンプが思い出深いものになっていれば私も嬉しく思います。ここまで読んでいただいた皆様ありがとうございました。



夕張市ことばの教室と親の会の歩み

～財政破綻を乗り越えて子どもを中心に共に歩んだ43年～

夕張市ことばを育てる親の会事務局長 宮本 美保
(夕張市ことばの教室 幼児言語指導員)

夕張は全国的にもメロンが有名で知られていますが、かつては採炭地として栄えた町でした。私自身も夕張出身ですが、生まれ育ったこの地で自分にできることがあれば役に立ちたい、と思うようになっていきました。そう思えるようになったのも、時間をかけて育ててくれた職場の先輩たちのおかげです。子どもへの対応や保護者支援も助けられてばかりで「このまま働き続けていいのか」自問と葛藤を繰り返す毎日でした。これまで関わってくださった保護者、子どもたちのおかげで仕事を続けてこられたと思っています。

勤務して6年目の平成19年、夕張が全国で唯一の財政再建団体（現在は再生団体になっています）に指定されました。当時の市（教育委員会）から事業費カット、教材費や消耗品費は大幅に削減されるなど、これまで通りの運営はできないと説明を受けました。破綻するということはこういうことなのかと思い知らされました。通級している保護者の方から「自分の子どもが今までと同じように教育を受けられないのであれば、夕張を出ていくことも考えなければいけない。」という声が上がったこともありました。すべては国の管理下になり、多くの市民が流出していきました。そのときの重苦しくてやり場のない気持ちは今でもはっきり記憶しています。

ただ、一方では苦しい状況の中、手を差し伸べてくださった企業や会社がたくさんありました。そのおかげで、予算が付かず断念した事業（こどもの発達を促すための専門家による相談事業）を引き続き行うことができるようになりました。専門家からのアドバイスは、自分たちの指導を見直す貴重なものなので、この事業が継続できるようになったことは、大きな喜びでした。その後、他の市町村と同じように必要な教育が受けられるように教育委員会の働きかけで教材・教具や消耗品が予算化されたことも本当に嬉しかったです。全国ことばを育む会からも、“トイドネーション”という形でお人形やゲームなどの教材をいただきました。たくさんの方々の支えに感謝の気持ちでいっぱいです。

このような財政難の中にあっても、親、子ども、先生たちが手をつなぎあって様々な活動をしていることを知ってもらいたい、と財政破綻した年から現在も広報「ひだまり」の作成・発行を続けるなど『夕張市ことばを育てる親の会』は、開設当初と同じ理念で活動し続けてきました。

この3年近く、コロナ禍で予定していた活動を中止せざるを得ませんでした。今年度は『親子バス遠足（ぶどう狩り）』を実施することができました。予想を上回る81名の参加申し込みがあり、親子同士、友だち同士、笑顔でぶどうを食べている姿を見て、役員会でいろいろと検討を重ね、開催できて本当によかったと思いました。12月には子どもたちが楽しみにしている『クリスマス会』を計画しています。役員一同、子どもたちの笑顔が見られるのを楽しみにしながら準備しています。このように通級してくる子どもたちや保護者の方たちが代わっても、

子どもの成長を願う親の想い、親の会の理念は脈々と受け継がれていることを実感しています。

最後に、夕張市は平成23年市内の小学校が一つに統合されました。『夕張市ことばの教室』は、これまで通り幼小併設共同運営の形で小学校内に設置されました。幼児のときから児童の先生と顔見知りになれること、その保護者も安心して就学を迎えることができ、小学校の先生との引継ぎもスムーズに行えるなど、たくさんのメリットがあることも書き添えておきます。

夕張岳が見下ろすこの地で、これからも親と子ども、先生たちが手をつなぎあい、三人四脚の歩みを続けていきます。



新理事さんより ご挨拶

よろしくお願いいたします

網走市ことばを育てる親の会
大類 典子

この度『網走市ことばを育てる親の会』から『NPO法人ことばを育てる親の会 北海道協議会』の理事に就任しました大類典子です。よろしくお願いいたします。

私の息子は、現在中学2年生で特別支援学級に在籍していますが、小学校の6年間は網走市の『ことばの教室』に通っていました。小学校時代は息子にとっても私にとっても辛いことが多く、「もう学校には通えないかも…」と思うことがたくさんありましたが、ことばの教室の先生方の支援や親の会で出会った保護者の方々と繋がりのおかげで一つずつ乗り越えていくことができました。そのため卒業後も親の会に在籍し、活動に参加させてもらっています。

道の親の会のことは分からないことばかりでご迷惑をおかけすることも多々あると思いますが、皆様方にご指導いただき取り組んで参りたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

谷口大朗さん、谷口恵美子さんが、理事を退任されました。ありがとうございました。

谷口大朗さん

北海道協議会の副会長として14年間勤められました。旭川地区の会長として活動されている立場から活動の知見や課題を発信され、冷静なスタンスで会の運営に活躍されました。専門職である福祉行政の情報も提供くださり会の活動に大きな視点をいただきました。大会や総会などの行事では、にこやかな笑顔で周りを和ませてくださいました。長い間ありがとうございました。

谷口恵美子さん

北海道協議会の事務局員・理事・専務理事として35年間活躍されました。会の屋台骨として、幅広いネットワークを持ち、温かい人柄と力強いエネルギーで会を支えてくださいました。キャンプ、研修会、相談会にはいつも笑顔で周りを明るく包み込んでくださいました。長い間、ありがとうございました。

北海道新聞より親の会に取材の申し入れがあり、福井会長のインタビューが10月2日の朝刊に掲載されました。掲載に当たっては北海道新聞社より著作物利用に関する許可をいただいています。



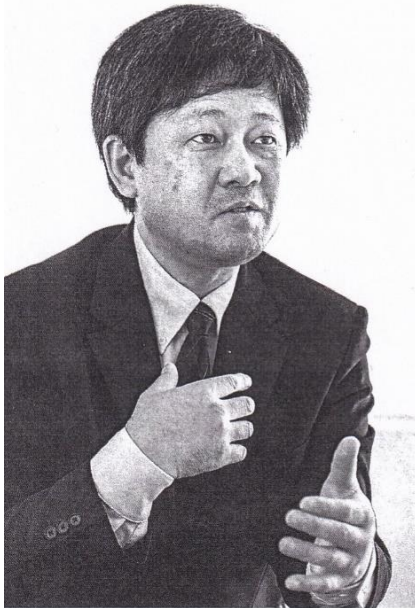
興味 深人

インタビュー

2022.10.2

ことばを育てる親の会北海道協議会会長

ふくい としろう
福井 紀郎さん



病気や障害などで言葉の理解や発話が遅れたり、話し言葉がなめらかに出なかったりなど、言語の発達に心配のある子どもたちは少なくない。「こぼれ」を育てる親の会北海道協議会」は育つた子どもたちが幸せに暮らせるよう活動し、来年で発足から60年を迎える。2016年から会長を務める福井紀郎さん(54)に、会の方針や今の活動状況などを聞いた。

(文・田口谷優子、写真・北波智史)

言語発達遅れの子支援

「主な活動内容を教えてくださいますか。」
「子育て支援セミナーや親子キャンプ、専門家を招いた研修会などを開いています。キャンプでは保護者が悩みを打ち明けたり、情報を共有したりする機会になっています。新型コロナウイルスの流行後は、思うように活動できず、会長になって6年。どんなことに力を入れてきましたか。」
「課題は地区によって違うので、できるだけ現地に足を運び、実情を聞きました。5年前からは、教員養成課程に在籍する学生にもキャンプや会合に参加し

てもらい、親が困っていることや求めている支援などを伝えていきます。」

「入会のきっかけは、次男の言葉の発達に遅れがあったことだそうですね。」
「入会したのは1999年、次男が2歳の時です。言葉が出ず、帯広市の療育機関などに通っていました。同じ状況の保護者と会いましたが、傷のなめあいのように感じて交流しませんでした。けれど、妻に『知恵と力を分け合うことが大切』と言われ、考えを変えました」

一人一人に個性 接し方パターンない

「こぼれを育てる親の会北海道協議会」唇などが割れている先天性異常「口唇口蓋裂」の子どもがいる保護者らにより、1960年7月に発足した。治療の保険適用などを求めて活動。82年に実現している。現在は、言語などに障害がある子ども向けの通級指導教室の拡大を目指している。単独または複数の自治体にまたがる33の地区組織があり、会員数は9000世帯。

「入会前の子育てについて教えてください。」
「次男への接し方が分からず大変でした。公園で自由に遊ばせていたら、次男は『入れて』や『買して』が言えないため、他の子どもとトラブルになったこともありました。」
「入会後は変わったのでしょうか。」
「多くの保護者と出会い、子どもとの関わり方を学びました。例えば、危ない物に触ろうとしている子どもに『触らない方がいいよ』と優しく言う。叱らなくても、子どもは触りません。自分は『ダメ』ときつく注意していたので、変えました」

「印象に残っている出来事はありますか。」
「(十勝管内) 幕別町親の会会長時代の2005年、雪中運動会を開いた時のことです。アイスクリーム作りで、子どもが分かりやすいように順序立てて説明する保護者がいました。子どもや保護者にとって、どんな場所でもありがたいです。」

「子どもにとっては『ありのまま』でいられる場所です。友達の名前を言えなくても仲良く遊べるような機会をたくさん提供していきたい。保護者は、親の会を離れても困った時には声をかけてほしい。いつでも帰ってこられる場所になりたいです。」

十勝管内芽室町出身。帯広市内の高校を卒業後、民間企業を経て1990年に道庁に入った。2016年から、こぼれを育てる親の会北海道協議会の6代目会長を務める。家族は妻と長男(27)、次男。自宅は同管内幕別町にあるが、現在は勤務の関係で釧路市に単身赴任している。

「会のメンバーには保護者以外に、小中学校の教員がいます。親と教員が互いに支え合って、子どもを中心に考えることですね。」
「子どもや保護者にとって、どんな場所でもありがたいです。」「子どもにとっては『ありのまま』でいられる場所です。友達の名前を言えなくても仲良く遊べるような機会をたくさん提供していきたい。保護者は、親の会を離れても困った時には声をかけてほしい。いつでも帰ってこられる場所になりたいです。」



北海道教育大学の齋藤真善先生の「読み書き障害の認知心理学的メカニズムと指導方法について」の特別支援教育研修会(道言協との共催)が、7月20日～8月10日にかけて録画配信にて開催されました。

特別支援教育研修会に参加して

高橋 諒

私は岩見沢市の「幼児ことばの教室」に勤務している言語聴覚士です。今回の齋藤先生のご講演は、言語聴覚士の専門分野とも重なるようなお話があり、非常に聞き応えがありました。また、このご講演を通して改めて思ったのは「私たちが当たり前のようにできることを再考する」ということの大切さです。私たちは読み書きを習得するにあたって、理論を学習して身に付けたわけではありません。何やらいつの間にかできていたのです。神秘的なことですが、それを神秘で片付けず、分解してつまびらかにしてくださったのが今回のご講演だったのではないのでしょうか。それではまず内容を振り返りたいと思います。

第1部では「音読が困難であるとはどういうことか？」と題し、読みの障害とはいかなることかということを紹介していただきました。まず文字を習得する以前では、聞いたことばを音に分解・結合する感覚を身に付けることが、読みの習熟度を上げるためには必要で、文字を習得した後は、音読の流暢さを高めることが大切とのことでした。「流暢に音読する」という点については、俳句に代表される「五七調」を取り上げています。五七調は流暢に読みやすいとされており、それはことばを2拍でまとめることでリズムが生成されることと、8音(7音+休符)が頭の中で処理しやすい長さだからだそうです。齋藤先生は、「小学校の読みの指導においては、日本語の韻律をたっぷり経験させられるような教材・練習が大事で、日本語の言語感覚を身にさせることは、読みの指導においてすべての児童に重要」だと最後に述べています。

第2部では、第1部でご説明いただいた内容をさらに深く掘り下げています。文章を音読する際には、音を分割する力と、リズムを身に付けることに加え、文字を目で追う力が必要になります。文字を目で追うにあたって、何文字ずつで区切ると読みやすいのか。これは齋藤先生の研究によって2文字ずつであることが明らかになりました。つまりことばを2拍で区切ることでリズムが生成されるという第1部で取り上げた内容と重なる部分がありました。

第3部では、漢字書字の困難について、中学生の事例を紹介していただきました。本人から「できること・苦手なこと」を聞き取り、それをもとにアセスメントをすることで、実態に合った「空書」という支援方法を編み出し、取り組まれました。

順番は前後しますが、第2部の最後で読み書き指導に対する提言として、齋藤先生はこのように述べられています。

「学習障害のお子さんは、一見脳の認知的な問題だと考えられがちだが、実は体の運用の問題なのではないか。発声・身体運用を体験し学習する機会は、幼児期においてから少なくなっているのではないか。ボールを正確に投げられるか、楽器を弾けるか、というスキルの習得よりも、自分の体の動き方を自覚し、それを自分の特性に合わせて運用することを学ぶことが大切なのではないか。」

私はこのことばが印象深く心に残っています。学力重視、スキル重視の現代社会に警鐘を鳴らすようなこのご提言は、「子どもが自ら学び、育っていくその能動性について、大人がその重要性と必要性をしっかりと理解しなければならないのではないか。」ということを訴えかけているように思いました。



理事会報告

7月10日(日)、8月27日(土)、10月15日(土)に、リモート形式で理事会が開催され、以下のことが話し合われました。

第75回理事会：7月10日(日)



- 今年度の理事会は、2ヶ月ごと(偶数月)に開催することにしました。
- 財務報告がありました。(納入いただいた各地区の皆様、ありがとうございました。)
- 対面での理事会を実施したいところですが、様々な状況を踏まえて、次回の理事会もリモートでの実施としました。
- 今年度の親子集団キャンプと、道言協との研修会について確認しました。
- 子育て支援セミナーについては、次回8月の理事会での検討事項となりました。
- 副会長を齋藤寛子理事にお願いすることになりました。事務局長については検討継続となりました。
- 定款、規定、運用の課題について共有し、今後検討していくことになりました。
- 理事の担当業務について話し合われました。
- 事業報告との兼ね合いで、9月発行予定の会報は10月発行にしました。

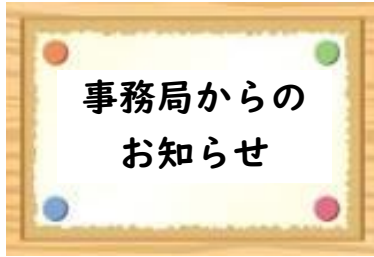
第76回理事会：8月27日(土)

- 余市キャンプが中止になったため、10月1日に再開催することにしました。
- 子育て支援セミナーの講師の先生の選定について、理事会で検討を行いました。
- 理事会はしばらくリモートで実施することを再度確認しました。
- 次年度以降の事務局所在地について検討を行いました。
- 理事の役割分担や運営方法について検討を行いました。
- 事業の延期などがあり、10月の会報発行予定だった会報は、12月10日発行分と合併して発行することにしました。

第77回理事会：10月15日(土)

トイドネーション、全道大会、理事の分担の詳細、全国誌『ことば』の執筆依頼、会報の内容について、2時間程度かけて話し合いが行われました。





(ホームページ案内)

北海道協議会では、ホームページでも
いろいろな情報をアップしています。
どうぞご覧ください。



URL:[http:// www7b.biglobe.ne.jp/~do-gengo/index.html](http://www7b.biglobe.ne.jp/~do-gengo/index.html)

○親の会の事務局連絡校は下記のとおりです。お問い合わせは下記までお願いします

〒060-0041 北海道札幌市中央区大通東 6-1 2

中央小学校ことばの教室内

電話(直通) 011-241-2533

○地区分担金の送金先は次の通りです。総会資料に同封した振込票をお使いください。

(ゆうちょ銀行の ATM を利用して、通帳またはカードで振り込む場合のみ手数料が無料となります。現金による振込等の場合は手数料が発生しますので、ご負担をお願いいたします)

郵便振替	□座番号 02790-5-□□44186 加入者名 NPO法人ことばを育てる親の会
郵便貯金 □座振込み	記号 19030 番号 32430171 □座名 特定非営利活動法人ことばを育てる親の会 北海道協議会
銀行	北洋銀行 北7条 支店(店番 312) □座番号 3527965 受取人 特定非営利活動法人ことばを育てる親の会 北海道協議会 会長 福井 紀郎



HSK 会報 昭和 48 年 1 月 13 日第三種郵便物承認 (毎月 10 日発行)

2022 年 12 月 10 日会報 180 号(HSK 通巻 609 号)

発行人 北海道障害者団体定期刊行物協会 (HSK)

編集人 特定非営利活動法人

ことばを育てる親の会北海道協議会 会長 福井 紀郎 定価 100 円(会員分は会費に含む)

連絡先 〒060-0041 札幌市中央区大通東 6-1 2 札幌市立中央小学校ことばの教室内 Tel.011-241-2533